

統



第 二 百 二 號

日蓮主義の特色

女子大學講師 高島平三郎君

我國に於ける女性の地位と

日蓮主義

海軍大佐 佐藤鐵太郎君

穢多に就て

吉田堅晴君

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
（毎月）
（十五日）
明治四十四年十一月十五日發行第一第二百一號

（東京 三益印刷株式會社印刷）

日蓮上人云く

九月十二日御勸氣を蒙りて、今年十月十日佐渡の國へまかり候也、本より學問し候し事は佛教をきはめて佛になり、思ある人をもたすけんと思ふ、佛になる道は必ず身命を捨る程の事ありてこそ、佛にはなり候らめとをしはからる。
(御勸氣抄)

日蓮主義の特色

十月九日豊橋市妙圓寺中日蓮佛會に於ける講演に於て、九回に亘りて參陽新聞紙上に掲載せられ、東海道思想界に力と光りとを興ふるもの大なりしは、吾人の慶慶に堪へざる所也。記者は更に茲に此の卓説を天下に紹介するを幸榮とす。(三十一日稿生)

高島平三郎君

私は日蓮主義の特色と演題を掲げておきました。私の思想の徑路が不明である爲めに不思議に思ふことであらうと信するのであります。之れは東京天晴會の起因を説明したならば自ら明にならうと思ひますので一言之に及ぼしておきませう。

則ち日蓮上人を讃仰し、日蓮主義を研究して自覺せしむると云ふに起因するのであります。ならば自ら此等の思想に啞着してまいるのであります。又未だ宗教心の無き人にしても、宗教を研究して來たならば、勢ひ日蓮上人に就て考を及ぼさねばならなくなり、日蓮主義を研究する様になるのであります。私は二三年來日蓮上人の遺文録を讀んで感激致しまして、それより引續き研究をして居るのであります。未だ信仰の觀念に

乏しいので、諸君にお教へするとかお話するとか云ふ資格はないのであります。唯人格主義に於て、最も痛切に必要と感じた結果を自らも信じたので、又他にも勸めて信せしめようと云ふ思想より、是れまで、研究日淺く、信仰尙未だ薄いにも拘はらず、各處に上人の人格を讃仰し上人の主義を鼓吹して居る様な次第であります。

凡て時代には時代に相當の教のあるのは勿論であります。道と云ひ教と云ふも眞理は不變なものであると云ふでありませうが、それは説の如くではあります。形を變へて時代々に必要の起る、それに據て、或時代には現世を厭ふて未來を欣ぶと云ふ教の顯れたこともあるのですが、實際と理想との調和を缺いて居るものであるのであります。今日の有様に照しまして未來を欣ぶと云ふ則ち空想を欣ぶ時代でないことは、私が以下説きます處を聽いて頂いたならば、自ら了解すると確信致すのであります。

抑々天晴會は法華を信するのであります。日蓮宗を

信する人のみの團體ではございませぬ、併しながら區別することは出来ぬかも知れませぬが、一般的であつて、一宗一派に拘束せらるゝものではありませぬ、唯日蓮上人の人格を欣賞し、其主義を鑽仰し以て精神的修養に努めると云ふ者の團體であります、けれども、人格主義を研究し鑽仰し續て信者たるに至るやは之れは自然の趨勢となるやも知れませぬ、而して私が日蓮と云ふことを注意する様になつたのは、基督教家たる内村鑑三君が著はされた、日蓮論を讀むた時に、籠氣に初めて人格主義を知つたのでありました、私は此内村君の著述に就て上人を嘆美して居るのを知て、實に豪いものであると思つた、故に諸君中、宗門の毛嫌ひを捨て、人格、信仰、主義を研究して頂きたいのであります、然る後に歸宗すると否とは諸君の認識であります、扱て私は上人の人格的方面に感激したのでありますから、其方面より説明致せば宜しいのですが、今は時間が無いのでありますから、直に主義に就て話すことに致します。

第一に上人の信仰と云ふことであります、上人は統一主義を唱道したのであります、統一主義と云ふのは、世の中に種々なる教がありますが、之を歸着的に纏て、之を一貫せしめると云ふのであります、米屋ばかりでは困る、何れの商賣も必要ではあるが、何れ歸着すべきものがなければ困る、併しながら、米屋酒屋は兩立することは出来るが、佛教の教派の如き、歸着點の統一を見出したいと云ふのが上人の要求であつたのであります、而して之を統一したのが上人でありました。

統一と云ふ事は何であるか、要するに一にすると云ふのであつて、何物も無くして仕舞うと云ふのはありませぬ、英語で云ふコンネクション、シントシス、又はネクチュアールと云ふ意でもなければ更にコンパウンドの意でもない、畢竟統一はユニチー、ユニットと云ふのであります、則ち凡ての元を捕捉して一に歸着せねばならぬと云ふのであつて、其統一を目的として其の目的を信仰上に對照させる時は法華經に歸着する

のであります、而して論理の筋道に照らしたのであつて感情習慣から來た問題ではありませぬ、然るに一般の狀態を見ますに信仰の歸着がない爲めに、思想の變換からして、種々なる感情に刺戟されて、雜漠なる信仰を表して居るのであります、則ち交替信仰と云ふのであります、佛と賣樂屋と間違てしまつて、彼處の仁王は利くが此方の地藏は効能がないと云ふ未開時代の信仰の行はれて居るを以てあります、日蓮上人は此等の傾向を嘆せられ、又其思潮を疑はれて研究の結果、法華に於ける久遠實成の本佛こそ人格的の佛である、と見定められて妙法蓮華經を立てられたのであります、則ち世界に於ける所有ものを本尊に攝取して統一せられたのがそれであり、彼の曼陀羅を見ましたならば此の間の事が了解せらるゝ事と信じます、而して之を現實界からのみでなく、理論の上から見よしても統一されて居る事が知れるのであります、凡て上人の執られた行動が此の理想と現實の兩點に一致して居つた事は云ふまでもないのであります、一

代の始中終統一的精神に外ならなかつたのであります、而して此の統一的行動を執る上に就て、上人は如何なる主義を以て處したかと云ふ事も研究して見ねばなりません、則ち上人は消極的主義であつたか、將又積極的主義であつたかと云ふ事を研究して見ねばなりません、此の主義の分るゝ處が日蓮主義の特色と否との分岐點となるのでありますから、此の點に就て説明することに致します。

日蓮上人の主義は消極的であつたか、將積極的であつたかと云ふ斷案を下すとしたなれば、勿論積極的であります、消極的と云ふのは、物に陰陽の別れがある様なものであります、陰は俗に云ふ受け身と云ふので内輪／＼と行ふて居るのであつて、之を消極と云ふのであります、又積極とは陽であつて飽くまでも奮闘して行く、如何なる場合でも屈せないと云ふのであります、上人の一代に於ける行動は凡て積極的が多かつたのであります、處で諸宗に於て、説く教説を見ますに消極的に傾くものが多い様であります、彼の朝に紅

顔あつて夕に白骨となれる身なりと云ふが如き全然消極的論法でありますが、之れは一面から見ますれば積極を喚起する手段である場合もあります、處が日蓮主義の特色としては絶対積極の手段を採つて消極的でないものであります、此の如き事が時代の必要に應じて發展さるべく生れたのが天晴會であつて、其天晴會研究の力を俟て一層の光彩を添へて來るのであります、更に此積極主義たる上人の國家的觀念を説明してみませう、上人の思想は國家的思想に富むて居つたのであります、上人の念頭には國と云ふ事を離れないのであります、凡そ宗教家の弊としては、國と云ふ觀念が薄いのであります、國よりも世界國民よりも人類と云ふ見方に傾き過ぎるのみならず、神佛は人類を守る、神佛は國家主權者より偉力のあるものとして居る爲めに國を愛すると云ふ精神に乏しいのであります、然るに上人は、唯日本に生れたから日本を愛すると云ふのみである、則偶然に愛慕すると云ふのみの意でもないものであります、則ち我々の先祖も働いた、而して此國

るのであります、從て其處に人格的の關係がありとせねば、此の如くなるには何かの理由が存在せねばならぬのであります、此の事をば、六百年前に於て日蓮上人は説明せられて居つたのであります、畢竟私は知らなかつたのであります、之れは私の罪であります、否獨り私が知らなかつたのみならず、多くの日本人が左様であつたのであります、日本の思想界に於ても研究者はなかつた、處が此等の研究に就ては既に外國人が却て云ふて居るのであります、則ち日本人は世界の文物を統一すると云ふて居るのであります、日本は不思議な國であつて、東西洋の文明を調和發展せしめて居るのでありますことを、私は二十三年前「國光」に論文を掲げましたが、同じく其意味でありました、佛敎は印度に興つて、支那、朝鮮を経て日本に渡來しました、が最後に法華經は日本に至りて弘まつたのであります、又西洋の文明は米國から輸入したものが多く、英吉利から、和蘭から、若しくは葡萄牙等からも輸入したものであります、その大體の偉力を以て輸入したのは米

を構成したのであるから、我々は此國を愛し此國を護らねばならぬと云ふが如き、薄弱なる理由としたならば、我々の先祖は餘計な事をして置いたと云ふが如き議論が出てくる恐れがある、併しながら、上人の國家主義は大に尊重すべき理由が存するのである、日蓮上人の國家的觀念は、信仰の上から出たのであります、則ち法華經の中から擴がり發展したものであります、法華の大真理を加被する、八萬の國にも勝つた靈國である、偶然なる存在でない、立派なる真理からして發したものと信するのであります、或者は日本の萬世一系たるを得るのは、島國であつたからである、島國は四面の攻撃力が乏しいからだと説明したが、薄弱なる議論と云ふべきであります、島國であるからとて、悉く然る所以はありません、布哇の如き、マダカスカルの如き如何であつたでせうか、思へば他に日本の如き國柄はないと云へるのであります、而して益々發展進歩の域に入りつゝあつて、衰退の徴を認めて居らぬのであります、世界一と稱せらるゝ亦偶然でないとい

國からであります、此の如く文明は東西から來つて悉く日本で同化して居るのであります、遊藝の如きものにして、碁の如きものは到底支那人の遠く及ばざる程發達して居りますし、技術に致しても、歐米の本家より以上發達して居ることは實例に乏しくないのであります、則ち日本では東洋の舊文明と西洋の新文明とを握手せしめて、東西を離れて一の日本流と云ふ新文明を作つて居るのであります、此等の關係を考へるに、風俗と云ひ、習慣と云ひ、美術、工藝凡ての表れが、凡て法華經の化身と見る事が出来るのであります、則ち宇宙の大系理、絶対の真理が法華經にあらざるはないのである、則ち日蓮上人は六百年前に之を説明したのであります、日本の國體に就て、忠君愛國の真理を説明したのであります、そは皮相の説明ではなかつたのであります、立正安國論は凡て之を説明したのであります、此の如きは日蓮主義の特色の一であつて、君に忠に、夫婦相和すと云ふ、皆な是れ法華の真理にして、日本に於て國家的と表はれたのであります

す、當時鎌倉の執權職たる北條氏に對して、何人も攻撃をしたものはなかつた、然るに上人は叛賊と呼びて之を攻撃する、流罪となり斬首の刑に處せらるゝも、屈することせぬ、要するに忠君愛國の國家主義である、天晴會が痛切に日蓮主義を主張するは此に所以の存するのであります。

日蓮上人は又個人を尊敬するのであります、併しなから一面國家主義を主張して居ると云ふことは、前述の通りであります、上人の個人主義は國家主義と衝突する様な事はありません、則ち上人の個人主義は、自尊の心から生ずるのであります、自己の人格を高める人格主義であります、墮落と云ふことは畢竟自己を輕する處から來るのであります、自己は大切なるものであると信じたならば、必らずや不品行なことは出来ません、個人を尊敬すると云ふことは之れから發してゐるのであります、此の我れは佛であると教へる、佛であつたならば勝手なことは出来ない、併しながら佛と人との區別が不明であると云ふであらうが、煩惱即

飲みたい食ひたいと云ふ様な慾の外には何もないのであります、之れを上人の宗教哲學から説いて見るなれば右等の如き淺薄なるものではありません、上人自からが人格の發展をして居るに照らせば明かなものであります。

日蓮上人は房州の一僻陬に生れ、所謂特種部落の出であるといはれて居るのであつたが、上人の人格の發展は大臣大將とも比すべく、更に向上して佛として人に尊敬されるに至つたのであります、斯かる向上發展の極は、心なき草木石土に至るまで凡て敬虔の心を以て感ぜらるゝものであります、而して此の如き場合多くは他の助力に倚るものであるが、上人のは獨行でありました、各宗の闍祖が多くは時の政府のパトロネーヲを受けて居ることは、歴史の上に明かであります、然るに上人は赤裸々でありました、上人の活動は、肉躍り骨鳴るの概があつたのであります、ルーテルと云ひ、基督に反對したポロと云ひ大英傑を以て目されて居るのであります、上人と同日の比較にはなら

菩提、寂光の淨土等よく、覺て佛たることを信じて之が行をなしたならば、時々刻々に佛が現はれるのであります、之れ上人の個人に重きを於かれる所以であります、斯くの如くにして、上人の説は衝突せないのであります、何の爲めかと云へば、統一主義即ち一の信仰からあらはれるからであります、されば家庭の爲め國家の爲め、夫れ々經營してゆくに就ても自己の人格の尊重から打算してゆく事になるのであります、婦人の學問をして男子の爲す様なことしたいと云ふは已に自己の尊重を缺いて居るのであります、自己は家庭の事を調理する、そのまゝ、國家の事をして居ることになるのであります、然るに近來は國家主義と衝突した個人主義が時々刻々にあらはれて來て居ります、本能満足主義と云ふ様な主義がある、而し我れと云ふものを分析して見る、此の我を以て個人とする、其個人は何に依て出來てゐるであらうか、此個人の中から親と云ふものを取り去る、妻を取り去る又子と云ふものを取り去る、としてあとに何にが殘るでありませうか、

ぬのであります、上人は天下何人も助けるものなく、獨立獨行で快舉を敢てしたのであります、終に己に敵するものからして鐵仰を受くる様になり、進んで今日あるに至りまして、日本の國運と共に、旭日昇天の勢を以て日本の思想界を風靡しつゝあるのであります、個人尊重主義に就て殊に青年諸君に注意を促したことがあります、則ち助ける人がないと云ふて、消極に流るゝが如きことが有つては、そは日蓮主義の人ではないのであることを記憶せよと云ふのであります、決して他を依頼してはならぬ、自己を依頼して行かねばならぬと云ふことを忘れてはならぬのであります、斯く自己を尊重するのが上人の個人主義で、則國家を離れざるものに屬するのであります、斯くせば、自ら進歩發展向上して人格を完成することが出来るのであります、思ふに上人は凡ての問題を説くに當つて、具體的であり、且現實的であるのであります、之れよりして生れた信仰であり、又哲理であるのであります、されば茲に信仰と哲學の方面に入つて話したいと思ふ

のでありますが、併しながら高尚幽玄の教理でありま
すから、此一場の講話で盡されざることを遺憾とする
のであります、多くの教説は具體的に教へらるゝもの
は甚だ少ないのでありまして、多くはアブストラクト
抽象的である、則ち現はしてみると云ふヤリ方は恰も
寥寥々々農の如き感があるものであります、日蓮上人は口
で云ふのみでなく、表はして見る方法を説いたのであ
ります、目前に忠孝を表はして見せる、之れが上人の
ヤリ方でありまして、則ち目前に君父の在るも在らず
が如き行をするのであつて、其行ひとして別段變つた譯
のものではありません、假に一例を以てすれば、學校生
徒に對し、忠孝の道の現實を求めたとすると生徒とし
ての忠孝は、教師の教ゆる事を忠實に勉強するそのま
ま忠孝である、他を考へて學に勉めざるものは忠にも
あらずれば又孝でもないものであります、要するに自己
の職分を勉むるものが、法華を人格化したものであつ
て、凡てを具體的に現實的になすべく教ゆるのであり
ます、凡そ讀書をなす方法を三種に分ちますが、その

一を色讀と云ふ文字を用ひます、色とは空に對するの
であつて、形を意味するもの、則體と云ふのと同じで
あります、その二を口讀と云ひ、その三を心讀と云ふ
のであります、口讀は唯口に讀むにとゞまりませんが、
心讀となれば精神的に讀むので、口讀に勝る萬々では
ありませんが、猶一步進めて色讀則ち體讀とならねば不
可であります、此體讀が則ち具體的現實的に法華を人
格化したものとなるのであります、口讀は心に體念
して身に之を應用する則ち色身不二の當體を以て法華
を現實としたのが日蓮上人の行爲であつて、色讀の典
型であると信すべきであります、則ち多くは心讀と色
讀とのアクシミレートして同化して行かぬでは、法華
も天台や傳教と異ならなくなるのであります、哲學で
二元説を採るもの、多元論を用ゆるもの及一元論を唱
ふるものがあります、何れも多くは現象と實在とを
別にして居るのであります、けれども法華の上から解
釋して、六百餘年前、上人は既に現象即實在を唱破し
て居られます、而して天台若くは傳教の法華の見方は

理の一念三千を細説して居るので、其説たるや至れり
盡せりではあります、之を今日の上からします
れば關係が甚だ薄いのであります、則ち理想を尊び抽
象的に流れて居るのであります、然るに上人は此の身
此の儘實在である、久遠實成の本佛である、宇宙の絶
體を釋迦と見る、それより現はれてゐると主張してゐ
るのであります、上人の見る處の現實、現象は理を捨
てたものではありませんが、理の一念三千と云ふ、瞬
間の慾望そのまゝ佛であると云ふ様な今日主義ではあ
りません、則ち根抵の深い理想から、人間生活、上偉
大なる活動の結果があらはれると云ふ深い意味がある
のであります、此等意味深遠なる現象即實在の原理を
南無妙法蓮華經の七字に收めてあるのであります、
是れは自ら悟る事は出来るのであるが信仰満足せざる
に於ては醍醐の妙味傳ふることは難いのであります、
翻て今日の狀態を考へるに、日蓮主義が最も必要であ
ると思ふのであります、今日の如き擾亂せる思想界を
統一するには日蓮主義に過ぎたるものはないのであり

ます、危険思想ありと雖も、日蓮主義を以てせば統
一することが出来るのであります、今日は宗派の争を
なすの時ではありません、今日は厭世教を鼓吹する時代
ではありません、則ち消極的時代ではありません、報
徳主義も宜しいが、一步誤つたならば消極主義となる
恐れがあります、今日は積極主義を以て活動すべき時
代であります、千八百七十年獨佛戰爭後は凡ての場合
積極主義が發達したのであります、日露戰爭も左様
でありました、露國で鐵條網を造つた、日本では之を
破壊して突撃する、猪武者の行爲であるが、要するに
日蓮的積極行爲であつたのであります、此の表れは畢
竟國家主義から來たのであります、忠君愛國の精神は、
生命を國家君主に捧げると云ふ大信念の元に發するの
であります、此大信念は國民の持つべき天職であつて
日本に生れたを幸福と感じ、日蓮の説かれた如き大信
念人格國家の各主義を奉じて、一兵卒と雖も壓迫を加
へず同一に大切に取扱ふと云ふ個人尊重主義を實行す
ると云ふことは、今日の思想界を統一するに必要であ

ると確信するのであります、而して凡て此等の説は、具體的たるべく、口で之れを説くとも、實行出来ざるに於ては何の感じもないのであります、天晴會員は凡べて此の主義を行ふて居るのであります、理想にのみ馳せるの不可を認めて居ると同時に、現實を捨てるの不可を認めて居ります、理想に偏し現實にのみ流るゝは個人國家主義の滅却であると考へねばなりません、此の如く考へて来たならば、日蓮主義が何故に重せらるゝものか、何故に鐵仰さるゝかと了解すべきであると信するのであります。

日蓮上人云く

法華最第一の經文を見ながら、大日經は法華經に勝れたり、禪宗は最上の法也、律宗こそ貴けれ、念佛こそ我等が分に叶ひたれと申すは酒に酔ふ人にあらずや。

我國に於ける女性の地位と日蓮主義

(青山安川邸にて開盤せる地明會に於ける講演也) (講義は筆者の任意に) (三上白碧生)

佐藤 鐵太郎 君

私は元來斯う云ふ風に出ます様な資格がありません、二十餘年と云ふ間船に乗つて居りますので、水兵を集めて詰らんことを勿體をつけて小言を云ひますのは、大分慣れて居りますが、私が餘り甚いことを言つても氣分に障るであらう、其れともまた諸師を餘り譽め上げると講演の甲斐がありません、その處をポイント旨くぼかして申す事は中々に困難であります、柳の枝が風に吹かれてふはりと當りますと反て心地よく感ずるのであります、同じ木の枝でも松の枝か何かガサ／＼と當りますなどは、あまり心持の住いものでありません、併し物は考一ツで花の萎むのを見て無常を感

ずる人もあり、變て美しい實を結ぶであらうと思ふて楽しく思ふ人もあります、私の講演なども、氣に食はぬ事を云ふと思存す方もあります、又他の一方には成程と思存す方も御在りになる花らうと思ひます、そこは何うも心の置き方に依て違ふのであります、是も私が能く人に云ふのであります、何事も見様に依ては色々になります、同じ水でも天人は瑠璃と見、餓鬼には火に見へると云ふので、誠に詰らん事でも考へ様に依ては大分面白くもあり利益になる事もあります、或人が横須賀の停車場からサガミと云ふ船を見まして、アハハあれが有名な三笠かと云つた御話もあります、是なども能く考へますと、物事は一方から計り見るものではないと云ふ訓戒になります、少し附會ではあります、私の近傍にツワイオリンピヤノ教授ツマラムと書いてある廣告を立て、ありませうが、ヨルク見ると、ピアノツワイオリン教授ムラマツで、何うも一方から見まするとんだ間違になる事があります、如何云ふもの

か私は斯う云ふ風にして物を見るのが好で御座ります、私の師匠は私がこう云ふ性質を持つて居るのを見込だものと見へまして、端書か何かで私を命びまする時には、乾度床の間の懸物を變へてあるとか、机の上に置いてある書籍の一ヶ所を開いてあつたり致したのであります、何うも今日になつても其風がありますので、時々妙な事で利益を得ることがあります、一昨年私が練習艦隊の艦長を致して居りました時、伊勢參宮を致し、その時、其時或る不敬事件が新聞に出て居りましたので、上流の人が之では困る誠に怪しからん男だと思ふて、或る人を考へ込みながら上陸して太神宮に參拜して参りましたが、フト車夫の祥天を見ましたら二九六七と云ふ番號がありますのでアハハ今日は斯んな考へを以て神様に參詣をしてはならぬ、二九六七は即ちニクムナであると思ふて、是迄詰らぬ事を考へて居りましたのを後悔し、清らかな心を以て參拜致したのであります、それから又或時海軍省に參りました歸路に、何となくクシヤ／＼しなが

ら電車に乗らうと思ふて見ますると、櫻田門の前に居
 りまするのが三九二と云ふ番號の電車であつたので
 ナール程御國の爲かと思ふて心を取直し愉快に歸宅し
 たことがあり、萬事斯う云ふ風でありますから妙
 なことで妙なことが當ることがあります。元來昔から
 の海戦に七と云ふ字に關係のあるのが多いのでありま
 す。二十七年二十八年は皆七に關係あります。七月二
 十五日の豊島海戦も、七月が七で二と五が七であつた
 末、九月十七日も七に關係があります。我艦隊が中に
 這入つたのが二月十七日であります。斯う云ふ風で西
 洋の方でも、有名なネルソンのトラファルガーが二十
 一日で、セントウインセント將軍のセントウインセン
 トは十四日と云ふ風に何うも云ふ事が多いのであ
 ります。陸軍の方は能く調べて見ませぬが、三十七八
 年の時も三十七年が第一に縁があります。少し縁が遠
 ら様ではあります。二〇三高地を取つたのが七師團
 で、これは二〇三は七でなければ割り切れないと云ふ
 譯なそうです。何に致せどうも海戦が七に縁が多いの

で、八月十四日なども參謀から敵艦が見へると聞たと
 きに今度こそは本道だと思ひました位で、五月二十七
 日の海戦に就ても私は二十一日を大に懸念したのであ
 りましたが、また二十五日も懸念して居りました際、
 二十七日に敵艦隊が現はれたと云ふ報を得ましたので
 之は屹度本當だ、第一明日も四七二十八だからシツカ
 りせなければならぬと思ふて、之を他の參謀に笑ひな
 がら話したことがあり、這んな事は誠につまらぬ
 話ではありませんが、能く解釋する癖を付けますと非常
 に勇氣を増したり、或は又一種の覺悟をさせて呉れる
 のであります。(三) ナポレオンと海軍の關係
 私は此間讀賣新聞を見て居ましたら、ナポレオンと
 女文學者との問答が出て居りました、彼の話しは珍ら
 しい話ではありませぬ。モウ一ツの御話しは非常に
 名高い話してあります。其話しと申しましたら、革命黨
 が政府の顛覆を唱へて示威運動をして居りました。が
 その内に一人の女があらまして、その女は又恐しい大
 きな相撲取の様な女で、芋俵の様に肥つた女であつ

ました。が、連りに「パン」を呉れ國民は貧の爲に死せん
 としつゝあると云ふて叫んで居りました。ナポレオン
 は夫を見てそんなに肥ても未だ肥りたいのか、この私
 を見るがよい斯んなに瘠ても「パン」を呉れとは言はぬ
 と云ふて、一同をドツと笑はせて其場を鎮めたと云ふ
 談があります。ナポレオンと云ふ人は大分口の悪い
 人であつたと見えます。讀賣新聞にあつたのは文學女
 史が有り丈けの言葉を以てナポレオンを賞めました。後
 で、閣下はどんな婦人を最も愛せられますかと聞たら
 ナポレオンは私の「女房」と答へた。それは當り前のこ
 とですが一體どんな婦人を最も尊敬せられますかと尋
 ねたら、今度は甲斐なくしく家内の事をして呉れる女
 であると言はれたので、是ではどうも仕方がない、な
 せ貞淑な婦人とか美しい人とか云はぬのか、實は内々
 自分の様な女を賞めて貰ひたいのであつたから、更に
 勇氣を鼓舞して、「御尤もです。そんなら閣下は女性中
 第一等の女性と思召されるのはドンナ婦人でありませ
 か」と尋ねたら、ナポレオンは直ぐに「一番能く兒を

生むのが宜しい」と申したので、流石の文學者も開
 いた口が塞からずに退却したと云ふ事ですが、何うも
 彼のナポレオンの戦術は、萬事この通りで敵の裏を衝
 いて勝つてあります。今一ツ思ひ出した博士の迂闊な
 話がある、或る博士が始めて御婦人方の居らるゝ會
 に出ますので、其友人に何か秘傳がないかと云ふて聞
 きました。友人は婦人と云ふものは何でも賞めて上げ
 れば、御機嫌のよいものだ云ふて話して聞かせまし
 た。之は日本でも然うだと見へて、この
 以前本會では誰人でも婦人の美德を讃嘆して御講話に
 本りをしたさうですが、私の御話しは少々恐縮であ
 ります。そこで博士が招待を受けた女主人に對しま
 して、貴女様の御耳の御輪廓は如何にも大きくフック
 リとして誠に御美しい御座います。御口と云ひ、御唇
 と云ひ、御手と云ひ、誠に申分なく大きく亦豊かに御
 見上げ申しますと云ふて一生の御世辭を申しましたら
 其女主人は非常に怒りまして挨拶もせずに行つて仕舞
 ひましたので、博士は大に驚きそこを出て友人の處へ

参りまして「君がア、云ふからその通り云つた處が、先生大變に怒つてしまつた、君は友達甲斐もない人だ」と云ふて小言を言ひましたら、友達は腹を抱へて貴下の馬鹿にも困る、女に向て大きいと云ふては不可ない女は小さいと云はれるのが好きだ、君は之れから他の婦人に向て名譽回復をして来たまへと云ふので、博士は今度こそは要領を得た積りで、或婦人の前に来て、種々話しに御座る、あなたの御目は象の如く小さく、誠に御美しいと云つたと云ふ事があります、之等の話は誠に無益ぬのでありますが、要するに人と云ふものは賞めらるゝのが好でありますので、兎に角御女性と云ふものは、一層賞めらるゝのが御好きの者と見へる、斯んなことは確かに御婦人方の缺點かと存じます、故に私も婦人方の美德を讃歎しようと思へますが、矢張自分の所見を述べようと思ひます。

全體日本の思想と致しましては「コゝミ女ニ反リ男」と申しまして、女は萬事控目と云ふことになつて居るが、之は誠に奥床しい事でありませぬ、併しどうも

娼

娼世理
娼世理

ありませぬ、先第一に伊弉諾伊弉冉御夫婦の間の如きは相依と相働まし充分に活動遊れたる御様子に想像せらるゝのであります、既に此時代より夫婦に關する立派な御教を示されて居りませぬ、西洋の「バイブル」に憑りませぬと、夫婦の活動は、先第一に神の意に背て林檎を食ふと云ふことから起ります、此際に御亭主の「アダム」が細君の言に從ふて罪を犯したのであつて、其習慣でもありません、何れにしても娼唱夫婦の風が行はれ勝に見へます、千字文とは反對に妻の方から唱へて夫が之に隨ふのであります、日本の教は決して然うではありませぬ、日本に於ては御婦人の性質に就きまして、最初伊弉冉の尊から御聲がかゝりましたが、其後の御事業が何うも不結果でありますので、何う云ふ譯かと思召されて之を天神に御伺になりましたら、「女言を定だめるに因て良からず」と云ふ御告があらまされたので、御婚禮の式から悉皆改められて夫唱婦隨の基を御立はなり、それより後天照太神を始め、立派な神々様が御降誕になり立派なる御國を打建

日本には女の爲めに大分損な思想があり、勝で誠に御氣の毒であります、第一女人は大鬼神なり能く一切の人を喰ふなどと云ふてあります、まごか然うでもありません、非道違ことを云ふたものであります、女は三界に家なしなども心細い譯ではありませぬか、五障三徳と云ふて偉器くもなれず一生他人に從はなければならぬ、殊に天地の中に女人と生れざる事を第一の樂みとしてあるなどは極端であります、日蓮上人は餘程氣の毒に思召され、法華經より外の一切經を見候に女人とはなりたくも候はず、或る經には女人をば地獄の使と定められ、或經には大蛇などと仰せられてあります、是等の思想は果して日本人の本來の思想でありましたら、勿論其以前にも佛教儒教の思想が傳はり、以上は幾分か感染して居たには相違ありません、聖徳太子が法華經を弘められましたので、法華經全盛時代には女人にも救ひの道があつたので、女泣かせの思想はなかつた様に考へられます、殊に古代に於ては日本の婦人は決して今日の如きものではなかつたので

られたのであります、こう云ふ譯でありますから、日本の國では男女の秩序が神代より確實に一定して居るのであります、此時代の女性性は決して消極的でなく、積極的の性格を具へて居る内にも、自から云ふに言はれぬ味を存して居たのであります、御存じの如く日蓮上人の御言葉に「女人となる事は物に隨て物を隨へる身也」とあります、此の難有意味は實に婦徳の根本かと考へます、大國主尊の御妃の須世理姫尊は大國主之尊と共に非常なる困難辛苦を遊され、此頃によく流行しする道行の御先祖とまでに御爲になり、苦勞遊ばしたのであります、御女性の美德で亦聖徳にもなります、御姫姑の念が殊の外深くあらせられ、御出になりまして、大國主之尊も御厭になられまして、木の國に行くとして御家を御出にならうと致しました、こんな事は此頃も大分多いと云ふ事でありませぬ、兎に角餘り御嫉妬はなりませんので御厭になつたのであります、其處を須世理姫尊は大國主之尊を送て御門前に御出になりまして、一つ御願を遊されました、此の御

娼世理
娼世理

願は誠に良い御願の様にかへすが、私記憶して居りませんから古事記から抜書き致しました、試みに其一部分を讀んで見ましよう。

八千弟の神の命や、あが大國主こそは、男にいませば、うちみる島のさきへ、かきみる磯のさきおちす若草のつまもたせらめ、吾はもよ女にしあれば、汝おきて夫はなし。

と仰せられたので、如斯美しき御心に對しては、流石の大國主の尊も真操高き御妃と別るゝに忍びず、其儘馬を厩に引き返させ、未長く御睡しく御暮しになつたと云ふ事でありませ、此御話などは、實に上人の仰せられた「女人となる事は物に隨て物を隨へる身なり」と云ふ神髓を發揮したもので、如何にも優しき御心の内に嚴然たる力の存すると云ふ事が解ります。

天照太神は女神にあらせられますが、須佐之の命が荒々敷御様子で震はするばかりの勢にて御出でになりました時に、之は危度善しき心にあらじと仰られて、御髪を御解になり男の如く装はれ、八尺句穂の五百津

右の女は

人を驚かしたる伊企難の妻大葉子は、韓國の城のべに立ちて大葉子は頭巾振らすもやまとへ向きて「云ふまでもなく日本の方に向ひ天皇陛下萬歳を唱へて殺されたのでありませ、上毛師形名の妻が夫を助け夫を賜えし敗を轉じて勝となし、終に蝦夷を敗りたる事蹟なども人の知る所でありませ、彼の橋姫尊が駿河の國の燒津にて、日本武尊が燒打に御逢になり誠に危く御成りになりましたとき、橋姫は如何致したと仰られたのを身に沁みて難有心得られ、相模より房州に御渡りになるとき、暴風に御逢になり御舟の覆らんとするを御覽になりまして、身を以て此難を救はんと云ふ思召で

問し君はも
の御歌を辭世と運され、夫に代はりて海底に入らせられたのでありませ、何と云ふ壯烈な御心や、如何にも優さしき内に鐵石をも鎔かすべき想情をふくみ、猛火も燒き難く激流も漂し難き、凜然たる男性的決心を有せらるゝ事が解ります、萬葉に

の美須磨流の珠を以て御身體を崇嚴せられ、矢の一杯這八つたエヒラを背負ひ弓を掲げ大地を踏み鳴らして

リヒラニハ千人リノ扱チ負ヒ五百入ノ扱チ附テ伊都ノ竹柄チ取リハキ弓ズニ振リ立テ堅庭ハムカ股ニ踏ナヅミ、雷ノ如ク轟ハラ、カシテ伊都ノオタケビ踏タケビテ

とありませる通り、凜然たる御様子にて須佐之男之命を詰問されたる御様子などは、後世の巴や板額などの夢想だも及ばざる處でありませるが、御女性の美しき御様子は天の岩戸の傳説によつても分ります如く、如何にも御床しく拜せられますのでありませ、又日蓮上人の仰せに

矢の走るは弓の力、雲の行は龍の力、男のしわざは女の力なり
とありませるが、上代の女性は、實に此御言葉の如く夫を佐けて大功をなし榮名を爲さしめたるは勿論、夫の愛の爲には一命を捧げて顧みざる決心は誠に感嘆に耐へぬのでありませ、新羅王醫肉を食へと云ふて新羅

ますらをのさつやたはさみ立ち向ひ時雨的形は見るに清潔けし
吾せこはものな思ひそ事あらば火にも水にも

吾なけなくに
兩方とも女性の作であります、何うしても此時代の女性は積極的であります、中々に近世の女性の風ではありませぬ、同じく萬葉に

吾せこはいつく行らん奥つ藻の冬張の山をたれか越ゆらん

などは夫が活動し妻が家を守る様子が見るのであります、而して其調子が如何にも高いのであります、今の俗謡に「御前百まで私や九十九まで」と云ふのがあやましが、あれなどは如何にも睦しい様に見えますけれども、少なくとも御前が死んでから七八年は生きて居ると云はぬ計りであります、アマリ皮肉かは知れませんが何うも感心せない、追分節の中に「風吹かば興つ白波龍田山夜半にや君の獨り行くらん」の歌に比べたら何うでありますしやうか、凡べてこう云ふ風に昔の

御女性は立派な性格を備へ、西洋の様に差出がましくなく、我儘もせず、自慚心にも富み如何にも立派な女性でありましたが、何うも段々と悪くなるとして近世の様になつたのであるが、何うか王政復古同様に女性の御様子も古に復りたいものと考えます。
 或一派の女權擴張者は、女性の權力を高め様と致して居られますが、大分御女性方に賞められて居るも故を以て、男子と女子の間に權力の問題が起さる様では到底駄目であり、男子と女子とは同情を以て相對すべきもので、決して權力などを争ふべきものではありませんが、何うしても物に随つて物を随へると云ふのでなくてはいけませんと思ひますが、兎角御女性と云ふものは名譽虚榮心が高いやうである、何うも虚榮心に捉へらるゝことが多い様でありますので、其極端になりますると誠に滑稽なことになるのであります、この頃は西洋の眞似をするのが流行致し、何事も眞似ると云ふ事は悪い事ではありませんが、併しヨーク考へて眞似をせぬとトンダ滑稽があります、或る海

は昔々
 したまふ
 行ふも
 行ふも
 行ふも

何うもこう云ふ傾向があるものであります、私が此頃學校から歸りました御件を連れた一人の御嬢様に逢ひましたが、此御方は白地の御單衣を召し品物は分りませんが、如何にも華美やかな紫色の御羽織を召して、それに膝よりも長い白いフックしたシヨールをかけて居らるゝのであります、こんなことを申上げると或は忌憚に觸れるかは知れませんが、屋根舟屋の看板の様にドッチから見ても間違のないものは宜しいですが、山川か袴やがよう分らぬ様な意味合のものは餘程注意せなければならぬと思ひますが之等の間違も畢竟控へ目に慎重に致さんからの間違であります、何事も人より早くなどと思ひます、御自分は宜いつもりでも案外に滑稽なことがあるのであります、西洋の便器を貰て菓子器に致したり、日本の娼妓の道中の繪を見てそれを眞似て日本の帯を買つて後前にしめて恥をかいだといふ話もないのであります、女の年始は三月までと云ふのは眞事控へ目の方がよいと云ふ教であらうと思はれず、世の中の譬にも梨の尻に柿の頭と云

んかの

軍の士官が、軍艦には火災配置と云ふ者があつて、咄嗟の間に合みますので、甚く其を感歎致しましてそれを自分の家にも試みようと思ひまして、早速に其配置を作りて之を女中に讀み聞かせて實行したそうですが、瀬戸物類は總て井戸の中に入れておこなつて居たので、女中は遠慮もなくそれを入れたので、訓練を終つて見たら大變だ、瀬戸物は悉く懷はされて仕舞いその上井戸易をするやら大騒ぎをやつたと云ふことであつた、マサかこんな馬鹿をやる人もあるまいが、何の思慮もなく人の眞似をするのは如何にも宜しくないのであります、殊に亞米利加の眞似などは餘程注意しなければなりません、世の中の流行と云ふのは、則ち物眞似と虚榮心との混合物であつたので、佛蘭西では一時立派な奥様方の外出の時は、必ず小さな犬を御連れ出ると云ふ風が流行したのであります、虚榮心の極大の種類の競争が起り、終に犬の班と同様の衣物を着て歩く様になつたと云ふことであつた、何たる滑稽でありませうか、併し流行と云ふものは

ふてそれ、旨い處がありますから必ずしも西洋の風はとらん、何でもかでも古風を守るの必要はありませぬが、如何か日本の女性として誇るべき古代の風を失はぬ様に致して戴きたいのであります、大和心を心としてなればいけません。
 要するにナポレオンの申された通り、身體が健全で内政を處理し其夫をして己れより外世の中に愛するものなしとまで思はするのが、本道の立派な女ではありますまいか、如何に物事が御出来になつても亭主を醫に敷島の道ではいけません、幾ら美しくも犬の斑色を眞似る様なうつけいものではないけません、何うしても矢の走ること弓の方でなければいけません、物に随つて物を隨へる風でなければいけません、如何に夫を佐けて活動すると云ふても、己を得ぬときの外は表面に顯はれてはいけません、綿入には綿程大切のものはありませんが、外から綿が見へては見ともよくありません、餘り妙なこと計り申上げては恐縮であります、今日では是で御免を蒙ります、御女性の爲に餘程良い

ん

訓戒であると考へたことがあり、すから一言申上げま

日低ければ雲高し

竟と云ふものは日低ければ低いほど高くなるもので
女は屈めば屈む程其徳は高くなるものであります。

研究

穢多に就て

吉田 堅 晴君

花笑ひ鳥歌ふ三春の行樂時。馴れ染みし都を去て、
此草深き遠州山奥に引籠るの止む無き運命に接した予
は、去年九月より持越の咽喉病に罹まされつゝ、合喉
劑を入れ青く透通つた塚を無二の友として、虚しき月
日を送りつゝ今日に至つた、病魔の鬼も流石攻めあ
て永の疲れに晝寝でもして居るか、此頃少しく快く覺
ゆるに至つたので、夜は、村里の青年を相手に、三時
間づゝを費し、晝は聖語朗讀や新聞雑誌の拾ひ読み、傍
ら思ひ立つたのが抑も此稿である。

穢多非人の名稱は明治四年に廢せられたから、今日
となつては止むなく特殊部落といふ名を以て呼ばれて
居る、然るに予が態々古い穢多の文字を用ひたのは地
方に來て見ると特殊部落といふては分らない連中が多
い依然として穢多で通用してゐる、畢竟言葉は思想の

日蓮上人云く
されば日本の一切の女人は外の一切經に
は女人成佛せずと嫌ふとも法華經にだに
も女人成佛ゆるされなばなにかくるしか
るべし。

(千日尼抄)

符牒で、多く用ひらるゝものが矢張其言葉として生命
があり、従つて何人にも分り易いと思ふがまゝに古い
穢多の文字を拾ひ出して、茲に掲ぐることにしたのであ
るところで予がかゝる題を撰んで紙上を汚すに至つた動
機といへば、地方に來て見ると穢多に對する觀念が、意
外に不明瞭で試に二三の人に就て調べて見た處は次の
如くである、甲曰く穢多とは穢れ多いと書く其穢らは
しきは今更云ふまでもない、乙曰く穢多は歸化人であ
るといふが、成程さうと見えてどうも眼球が違ふ、丙
曰く穢多喩へば便器の如し、洗ひ清めて飯器となすも
誰か此中の飯を食ふものあらんと、頗ぶる奇抜な答の
みであるが、要するに穢多其ものゝ眞意を解して居る
ものは殆どなく、先天的に穢はしきものとして御けて
居るのと、今一は彼等の宗教なるものが、佛教殊に眞
宗及び法華宗の二宗に限られて居るかの觀があるので
従つて予の地方では日蓮宗といへば即ち穢多なりと速
断して、非常に忌み嫌ふものさへ往々にしてある、内
務省始め特殊部落改善の聲喧しき今日、世の司教家

として説導家として任する宗教家、特に彼等と密接の
關係ある我門下生は、果して穢多なるものが、一般世
人の嫌忌するが如く、穢はしく價値なき改善し能はざ
る、異人種であらうかどうか、一通り心得置くべき事
であらうと思ふて、ほんの管見を茲に披瀝することゝ
したのであるが固より山中に塾居して、直接問ふべき
師なく、語らう友なく、漁るべき書物とても無いから
本橋の大體は予が東都遊學中恩師遠藤博士に就て學ん
だもの及び、實地見聞や圖書館等で多少漁つたものを
參考して、穢多とは如何なるものかといふ、ほんのあ
らましを述るに過ぎないのである。

一穢多の名稱

穢多の名稱に就ては、實に其土地土地で名前を異に
し、凡そ三十有餘種もあるが今一々之等を書ねて其言
葉の起因を説明するのは、少しく煩雜に過るかとも思
ふから略して、今は只其名目丈を列ねる事に止めやう
谷の者、山の者、野の者、坂の者、ちやうり(長吏、
張里、町離)かはた(皮田)、かたる(片居、傍居)かは

らもの(河原物)、ひにん(非人、貧人)、ほいたう(癡人陪堂、配堂)、ほねたらす(骨不足)、ゑつたはうし(穢多法師)、かはつばう(皮坊)、ちやうらん房(長吏房)、かんぼう(皮ン坊)、かぼう(火坊)、おんぼ(畑房)、ばんた(番太)、はたはちや(記録)、ちやせん(茶筌)、きんごらう(金五郎)、でい(曲履)、ひでんじ(悲田寺)、かはや(革屋)、かはしつ(革師)、じんぐわい(人外)よつ(四足)、彈左衛門、ふんじ(文治)、とうない(藤苗)はぎ(剃ぎ)、かいと(垣外)、しん(新)

斯の如く澤山の呼方はあるが、要するに大別すれば、一業務に依て生じたるものと、二住所によつて生じたるものと、三種族中著明の人物等の名詞に依て生じたるものに分類する事が出来る、即ち皮坊とか、曲履とか、茶筌とかの如き第一に屬し、山の者とか谷の者或は町離、片居と呼ぶが如きものは第二に屬し、金五郎とか彈左衛門の如きは、第三に屬すべきものである

第二種多の起原

彼等の起原に就ては、古來種々の臆説が行はれて居

山に住む物は毛の和物(鳥類)毛の荒物(獸類)大野の原に生ふる物は甘菜辛菜青海原に住む物は鱧の廣物(大魚)鱧の狭物(小魚)奥津海菜邊津海菜に至るまでに横山の如く凡物に置き足らばして奉る宇豆の弊帛を………

とあるに依て見るも、單に人が食ふのみか神前に供へたことも亦明かである、從て肉屠り皮剝を業とせし種多の祖先が、此餌取にあつた事は疑ひないことであらうと思ふ。

(ロ)外國渡來の民。此中には俘虜、降服、歸化、調貢、漂着等凡そ五種あるが、中でも俘虜の大部分が種多の淵源をなしてゐる様である、即ち大古に於ては俘虜は皆殺したものであるが、世が文明になるにつれて、臣妾又は奴婢としたことは、史實の説明する處で、彼の日本武尊が東夷を征伐せられたる時に「以所俘蝦夷等獻於神」とあるのは、俘虜を神宮所屬の奴婢としたもので、又神后皇后の詔の中に「人自降服乃解其縛爲飼部」とあるのは、俘虜を宮中の奴婢とせられ

るので、今其中の主なるものを擧て見れば、醜穢國の人種であらうとか、或は土蜘蛛の遺風であらうとか、或は海族の後裔であるとか、又は上古朝鮮から浮流して來たものであるとか、或は中古蝦夷征伐をした時の俘虜であるとか、或は太閤秀吉が征韓の際に於ける俘虜であるとか、或は神戸、陸戸(古代賊民の稱)の後裔であるとか、種々種多の臆説が行はれて、身分の賤しいものとか、或は生業の殘忍なるものとか、形體の汚穢なるもので、少しでも種多の現狀に類似して居るものがあれば、直ちに彼等の祖先であるかの如く、速断したものであるが、要するに起原は「餌取」といふ名詞の轉動で、之に諸種の原因が加へられて、今日の種多となつたものである、故に其淵源には俘虜もあれば、降服者もあれば、犯罪者もあり落魄者もあるといふ風に、種々のものが含まれてゐるであらうと思ふ、依て予は下其淵源を五種に分つて概略を述べて見やう。

(イ)餌取。太古は自然の要求として、曝肉の行はれたことは疑ないで、祝詞の、遷却祟神祭の下に

たものである、又我國が鎖國の方針を取らなかつた以前には、唐土や三韓との交通は非常に盛なもので、彼等の土から歸化調貢の民も亦頗ぶる多かつたので、是等古代外國から獻られた、男女や歸化した土人の付人は、良民の籍に入る事を許さず、諸國に分配して、靴履、鞍具、衣服の料杯を製造せしめたものである、又昔時外國渡來の民の多かつたことは、地名の考察によるも推知する事を得るので、武藏の高麗郡攝津の百濟郡杯いふのは、皆唐土三韓の民を住しめたものである、斯の如く澤山の渡來したものがあるといふものゝ、是等の總てが種多となつたといふのではなく、只渡來の民が生業或は身分の賤しくて屠者に類似してゐるものが、遂に種多と同一視せらるゝ様になつたものである(ハ)内國俘虜。此中には上古鬪争した時の俘虜、蝦夷征伐時代の俘虜、群雄割據時代の俘虜等を合んで居るが、之を種多の淵源の一に數へるのは、俘虜は人に賤められて交らず、遂に屠殺を以て業とする處から、餌取の仲間に入れられたもので、所謂種多に混じたもの

である。
(二)落魄者。榮古盛衰世の習ひ、天災や疾病、其他不慮の出来事は、貴人をして賤民の群に入るの止む無きに立至り、遂穢多となつたといふ様なものも、少なくないであらう。

(ホ)犯罪。法規を犯して賤民に落されたるもの、即徳川時代に、士族は平民に、平民は賤民に落し、又元祿の頃吉原廓内に、情死の流行が甚しかつた爲め、樓主等は其に謀つて、法規を設けて、情死を遂げそこなつたものは男女共に縛して三日間日本橋に晒し、其族籍を消つて穢多に落すといふ様なことも、江戸花街沿革といふ本に見えて居る。

以上述べた處は穢多の主なる淵源であらうと思ふが、世態人情の複雑なる中には、制度の變遷杯によつて混同せられたものもあるであらう。

第三。穢多の職業

彼等の職業の如何なるものかは、前に述べた名稱や起原の中で、略窺はれるが、尙一二の書を引用して是を

- 一 非人手下し(穢多彈左衛門立合非人頭相渡す)
- 一 遠國非人手下し(遠國へ遣はすべき旨穢多彈左衛門に申聞せ相渡す)
- 一 非人御仕置(穢多彈左衛門へ申渡し御仕置致すべき旨申渡す)但し遠國の非人は其所の穢多頭に仕置付候様申渡す

是等に依て見ると、穢多なるものは、主として皮細工半獄守、死牛馬の取扱、非人刑罰の際杯に使役せられ又其頭に彈左衛門といふ者があつて、是が諸侯の命を受けて部下を督し、同時に諸侯も亦此彈左衛門に、一其用向を傳へねばならぬ事になつて居たものと見える、然らば何故かゝる職業が後代盛に需用せらるゝに至たかといふに、一は支那朝鮮から獸類の革を用ゆる職業の傳はつた事と、一は肉食の習慣の輸入せられた事及び戦争の爲馬を用る其要求が盛になつて來た事等に基くものであらうと思ふ、最も我國は牛馬を食ひ其馬の使用が増加するに従つて、其死するもの多くなり、

詳にしやう、史籍集覽中彈左衛門由緒書といふがある、其中に御役目相對候覺として左の箇條がある。

- 一 御入國西丸御厩へ今以御坪綱御用次第差上申候事
- 一 御陣御太鼓御用次第張上候事
- 一 御皮類御用不依在邊被仰付次第相對候事
- 一 御尋者御用不限在邊被仰付次第相對候事
- 一 御半屋鋪焼失し節御囚人脇へ御出被遊候節外側に急度番人加勢差出候事
- 一 御召之斃馬埋申候人足差出相對申候事
- 一 御旅行の礪木戸口へ杖突人足大勢指出相對申候事
- 一 御傳馬役相對申候事
- 一 同入用の諸色芝上相對申候事
- 一 關八州惣支配之出入等私方にて裁許外御公儀様へ差出不申候諸法度之趣平日申渡諸事差引仕候支配之外にても御當地へ罷下り御出入の節は私方へ被仰付諸事差引申候事
- 享保十年己巳十月
- 淺草彈左衛門
- 又徳川氏百箇條には

勢ひ之を取扱ふものを生せざるを得なかつたのである又穢多を半獄守や非人處刑の隠に使役するに至つたのは、彼等の身位なるものが、一般社會より賤しと見なされ、從て最も其職に適當してゐたからであらう。

第四、社會より蔑視せらるゝに至りし原因

予は既に前項に於て、穢多なる職業が社會の需用に應じ、必然に起り來らざるを得なかつた事を述べた、然らば何故に彼等が社會より蔑視せらるゝに至つたのであるか、之には少くとも二大原因が含まれてあると思ふ、先其第一は神道の影響で、第二は佛教の傳播に基くのである、我國古有の習慣として動物を殺して、之を祖先の靈廟に供ふる事は普通ありふれた事であつたが、併し死せしものを見る時は非常に之を忌み嫌つたものである、之生々發展を喜ぶ我國民の感情に矛盾するからで、彼の古事記天孫降臨の段に、大國主神の子天若日子が高御産巢日神様の矢に當つて死んだとき、天若日子の友人なる阿遲志貴高日子根神といふが悔みに來た處が、其容貌が頗る天若日子に似て居る處か

ら、家族一同皆見誤て、「あが子は死なすてありけりあが君はしなすてましけり」といふて、其手足にすがつて喜んだ、すると阿運志貴高日子根の神は死人になぞらへられたのを痛く怒つて、「あはうるはしき友なれこそ弔らひきつれ、何とかもあれをきたなき死人になぞぶる」といふて、帯剣を抜いて喪屋を切りふせ、足で驅放て出て行つたといふ、彼の一段を見ても其如何に死者を穢さものととして、嫌つたかといふことが分る從つて觸穢の習慣は古から最も嚴充に行はれつゝあつたのである、觸穢の種類は甚だ多いが、今其名目丈を列ぬれば、死穢、殺人穢、五體不具穢、改葬穢、發墓穢、産穢、傷胎穢、胞穢、妊者穢、月事穢、失火穢、灸治穢、喫肉穢、喰五辛穢、獸死穢、獸五體不具穢、獸産穢、獸傷胎穢。

斯の如く澤山の觸穢があつて、此種の穢があるときは神前に出ることが出来なかつたのである、然るに世の進むにつれて、牛馬を使用する事は漸く多くなり、之を取扱ふものも必要を生じ、茲に一種の職業を生じ之

られ、彼等も亦現在の地位を鑑み、罪深きことを知ると同時に現在を脱却し、未來は幸福なる生涯を送らうとの志を發し、或は彼等の職業に伴ふ必然の罪惡を免んが爲に、佛教の加護を祈り、遂に今日の如く熱心なる宗教熱を發すに至つたものである、之に依て見るも彼等の卑しめらるゝに至つた原因は、神佛の兩教にあるといふものゝ、其主なる原因は觸穢の習慣、即ち神道の影響にあつたものと見て差支無いのである。

以上數項に亘つて予は穢多とは如何なるものなるかといふ一般を述べた、即ち彼等の祖先は餌取にあつて其淵源には、歸化及び調貢の民、俘虜、落魄者等種々のものを含み、其職業が觸穢に當るといふ處から、一般人と伍する事能はず、非常に社會から輕蔑せらるゝに至つたのである、併しながら此種の職業も社會上缺くべからざるものである處から、徳川時代の諸侯は皆之を其城下の郊外に住しめたものであるが、其穢はしきものとして輕視せられたる處より何となく、下等人種といふ觀念よりも、寧ろ穢はしき意味あるものゝ如く

等職業に従事するものは、遂に穢多さものととして神前に出る事が出来なかつたのである、然るに我國は古來神國で、神を祭ることは殆んど國教ともいふべき様になつてゐる、そこで神を祭る事の出来ない之等一種の人民は、一般人と伍することが出来なくて、遂に輕視せらるゝに至つたのも自然の結果で亦止を得ないのである。第二の原因としては佛教が渡來してより以來、殺生は五戒の第一位にも教へられ、非常に之を戒められたるに彼等は此殺生に従事せねばならないといふ様な點からも、彼等の位置を低からしめたものであるが、併し主なる原因は第一の觸穢の習慣に基いたものと見て差支ない、然るに彼等が卑めらるゝに至つた原因は只管佛教の影響にあるかの如く斷言する者もあるが、之は大なる誤解である、といふのは彼等の職業はよし一面から見ても忌むべきものにせよ、社會に取て必要缺くべからざるものである以上、佛教とても左程甚敷卑む事なく、寧ろ一面に於ては深き同情を以て之を救濟せんとし、遂に非常なる勢力を以て、彼等の間に弘通せ

思はるゝに至つたのは、我國古有の習慣上亦止むを得ないのである、然らば彼等は果して穢はしきものであらうかどうかといふに、今日の思想から見れば、固よりかゝる意味のあるべき筈はない、のみならず社會にては無てはならぬ職業である、若之を穢はしいものとして御くる時は、西洋人の多くは皆之を穢多の一族として排斥せねばならぬ、又事實徳川時代の人は、西洋人が喫肉する處から之を禽獸視し穢はしきものとして西洋人の江戸城下を歩行するのを以て、我が神州を穢すものであると罵つた事さへある、故に徳川時代の人から見れば、西洋人も亦穢多の一種であつたのであるが、今日となつては、我國でも盛に肉食をし、靴を穿ち毛皮を用ゆるといふ風で、古の様な觸穢の習慣は到底行はれない、従つて西洋人を見て卑しきものとせざるのみか、其才藝の長じ、文明の程度の進歩せる點に於て優良人種とし、西洋崇拜熱に浮された時代迄もあつたのである、果して然りとすれば特殊部落其ものも何等通常人と異なるなく平等なる人種として取扱ふべき

は勿論、若し彼等にして、一朝、才藝が一般人より秀づるといふ様な時代が来たならば、寧ろ敬せらるゝに至る事は自明の理であらうと思ふ、只今日の處長年月の間穢はしきものとして斥けられた習慣が存積せる爲に何となく穢多といふ聲を聞けば、即ち穢はしきもの様に聯想せらるゝのであるが、其實何等穢はしき意味は見出されないものである、故に予は今後の宗教家殊に彼等に縁深き、我日蓮門下のものは、彼等に一段高い自覺を與へ、彼等をして益向上發展せしめ、一般人民と融和することに努力して頂きたい。(完)



日蓮にとりて佐渡は即ち末法の毒量品なりき。鎌倉の反對者が彼れを北海の孤島に放逐したる間に、法華折伏の使命を付屬せられたる末法の大導師は、更に此の謗法の國土に大法雨を雨らすべく出現しぬ。末法の大導師とは言ふまでもなく本化地涌の上上行菩薩にして而して此の一大使命を自覺したる者は即ち日蓮其人に外ならざりき。

(標牛全集第四卷 九〇三頁)

法 鼓

東京天晴會

◎十一月十一日第三十二例會を九段坂上富士見軒に開けり幹事開會を宣するや蓮田講師は「茂原山古文書に表はれたる聖廟門下の勤王事蹟」と題し宗教家及信徒にして建武中興の事業に盡したる事蹟を擧げて日蓮主義と勤王者の關係を史的資料を提供して一般の研鑽を促がして壇を降るや食堂の準備成りて晚餐の卓に就き宴饗なるとき幹事は起て新入會員を紹介せり

- 實業家 千原伊之吉君
- 統一通信社長 高鍋 天統君
- 海運業 阿部善三郎君
- 文學士 千葉 正一君
- 愛國生命保險 石川 五郎君
- 株式會社主事 梅村 實藏君
- 法學士 梅村 實藏君

食後境野實洋君は消極的保守的の教義に現代に必要を認めず今の現代は事なるを要求すと言言の印を説明し更に日蓮主義の活動的の意義を述べんとしたもなるべけれども其事と云ふ意味が眞言と日蓮上人主張の事とが或頗の如きかの辯論を爲して降壇するや本多日蓮師は突如壇上に現はれて友人境野君の所論に對し少しく辯説する所ありとの冒頭を措き日蓮主義の事は眞言に言ふ所の事とは全然其意義を異にする旨趣より説き起して佛陀

救済の慈悲と衆生信行の關係に就いて圓解を以て詳細なる説明を試み大て高島平三郎君は宗教の意味に就いて東西洋の學者の説を引き信仰の對象が大事なるは勿論吾人の實感信仰の方と本尊の應同力と一致する處のものなればならぬとて日蓮主義の事蹟を論ずること懇切なりき新く境野君の事蹟説明が未だ日蓮主義の眞義に到達せざるを以て一般の諸君の惑に入るを思ひ本多師と高島君とが其意見を發表せられたるは近來の壯快事にてありし又赤尾辯護士は十月房州の靈地を巡拜したる狀況を述べ本多師亦靈蹟保存の急務を論じて所感や希望を告白し散會を告げしは午後十時なりき此日會員は益々所多大皆歡喜法悦に充ちたるを見うけたりき

地 明 會

◎十一月二十三日午後二時青山安川邸に第五例會を開く予五島盛光君は簡明平易の句調を用ひ現代婦人教育の缺點及び虛榮に捉はれたる態度を指摘して一般の反省を促がし女性と日蓮主義の關係を説いて信仰に及び即ち云々今この學者は理屈計り言ふて居るそれはいけぬい信すれば感應がある信仰は何かと云はは其靈力に依りて身も心も爽快となり凡てに満足を得て勇氣が起る獻身的に實行すれば感應がある疑が居つて居つたならば信仰は起らぬと述べて精神的自覺と信仰とを勤め本多師正は道の大事なる所以より説き起して天地に存

第 一 義 會

する靈氣論に及び云々天地間には一種の靈氣がある正大の氣が充實して居る科學的の空氣を吸ふて居るのは肉體である人間としては正氣を吸はねばならぬそれを調べて行けば靈氣が宗教上の本尊の中に調ふて居る吾人は天地絶待の氣と一致して行くのである日蓮主義は宗教の頂點であつて絶待圓滿である願はくはこの主義の下に集まるものは大なる理想を自覺して模範者となるべきを論じ大主義の靈に接するを得るに至れる幸榮に感ぜしむるものありたり尙ほ講演後茶菓饗應ありて閉會したるは午後五時過なりき

◎十一月五日例會講演を開く修法の後石川顯隆師は感應に就いて幾多の例證を擧ぐ吾等が一念信仰の感じと佛陀大慈の應同は境實合して佛果圓滿を期すべしと誦訓に因て立證し井村日成師は道の大事なる所以より説き起して肉のみに生きるものは既に人間として價值なく肉も靈も共に活躍することは道の根柢を必要とするの旨を懇示して日蓮主義の第一義を知らしむ求道の念厚き會員は襟を正して傾聴し益々大主義の靈光にうたるゝものがあつたに相違ない

妙 教 婦 人 會

◎古來英傑と呼べるゝの士は何れも家庭の訓

育が普通でない而して家庭は多く婦人の宰する所であつて婦人の舉手投足なほ言葉遣などは直ちに兒童の模倣する所となるは言ふまでもない家庭の婦人が宗教上の信仰の基礎に立ちて精神のつから餘裕の存する底に於て萬事内政を處理し兒童を教養して行つたならば英傑は作れないにしても悪い輩のある人間は出来まいとおもふ罪のない人間が出来上れば更らに之を宗教的に指導するの機会さへ與ふれば完全な人が作り上げられるのであるから婦人は大に自己を尊重して出来得べきだけ修養をしまつた教訓になる談話を聞くことが大事である教訓を聴き修養の歩を進んで信仰確實になつたならば其家庭は必ず平和の風をよめいて圓滿にして生氣ある愉快なる時間を送ることが出来る如何に信仰があると言つても夫婦兄弟の關係に於て波風が荒い様ではそれは日蓮主義の信仰でない日蓮主義は其信仰者一人だけの慰安満足を興ふるものでない其信仰に入るならば大作用として凡ての關係に活現せねばならぬこの心得が大事である十一月十六日午後一時より例會を開き吉田辯護士は人間精神の放棄なる状態を指摘して佛陀の聖訓に從ふべしと論じ井村僧都は一時の名利に走りて永久の滅亡を招くは人自身の大損失なれば信仰の生命に因りて永遠の生涯を送るべきに就き業々として詳説せられ茶菓の供養ありて散會したるは午後五時であつた。

法 國 會

◎十一月二十日午後六時より日本橋本公園御橋亭に於て例會を開いた三上義君は日蓮上人の奮闘主義活動主義が現代に流行する淺浮なる意味にあらざるを呼び上人の活動主義なる内容に就て動勉の精力剛健の氣風自重の念の厚きを紹介し更らに日蓮によりて日本國の有無にあるべしとの大確信を説き圓日抄の三大誓願を拜して上人の大徳實に及びこの内容ありてこそ始めて活動も奮闘も及ぶべき吾人は其一分の意味なりとも實行することに努めざる可らざるを誨ひ講演後座談會に入り熱心なる聽衆は種々の質疑又は信仰の告白などありて一般の信仰を進めことに聽衆の一人天台宗に屬するもの居残りて種々の疑團を提出し會員は懇切に教示を興へ遂にその大主義に信仰を定むべきを誓て散會したるは午後十時であつた。

地 見 會

◎この會は眞正山根日東師主普の下に設けられたので十一月十日發會式を淺草田圃慶印寺に開いた午後一時嚴肅なる修法を行ひ直ちに山根氏は會設立の理由を述べ井村僧都は宗教は人生必須の大要件なりと物質文明に惑ふて精神問題を輕視する潮流を嘆ひ靈肉共に活躍し人生の意義を全せよと奮起を促がし本多大僧正は個人家庭國家何れにありても教な

くんば即ち亡ぶ殊に國家には天地貫串の名教の確立すべき所以を説き人道の根柢は大宗教に依り國民の道徳生活の意味皆悉く大宗教の方に依りしんば發達し向上し得べからずとて各方面より詳説せられ尚餘の生活に於て物の生活を在りしむる程の法益のあつたことを見うけた講演が終ると庭園にて一同に甘酒の饗應があつたこの日來賓として天請會の名士十數名が日蓮主義活動の態度にて講聽して居つたのは普通聽衆をしてさらに敬虔の念を起さしむる靈力があつたこととおもふ尚ほ同寺總代人は能く力を致して接待につとめて居たが益々信仰を強めて外護の水分を盡さるゝことを望む。

國 明 會

◎十一月十九日第九例會を開いたこの日空が曇つて居つた爲に聽衆は少なかつたされども能く爲一人の聖語を體するものは佛念の念を起してはならぬ五十聖語の傳道の方法あるを思へば一人の聖語者を作ることが大事である午後二時伊藤實樹師は一代教相を慨して法華の最第一なるを明かして聖祖の佐渡流罪の生活狀況を述べ偉大なる聖祖を紹介し三上義君は教の尊重すべき所以を説いて信仰と生活の調和點を示して講演を了り來會者はさらに明春より聽衆を集むることに力を盡すべく約して別れを告げた。

養 德 兒 童 會

◎十一月十八日午後二時第五回例會を品川町妙蓮寺の本部に開く、會する者百八十名笹川山根僧師の有益なお伽嚨に坂田東洋君の餘興講談あり、茶菓の饗應に學校用品、ポンチ類、新體詩等の土産を兒童一同に與へ午後五時閉會す、今回は竹内ナカ子女史が愛兒七五三の祝を顯本的に行ひ、特に金若干を本會に寄附せられ淺尾清藏君が毎百回五十人分の茶菓を寄贈せられ且本會の爲に勞苦を厭はず斡旋せられつつあり、其他信徒諸氏が應援贊助を賜はらるゝ等如何に本會が理想以上の好果を收めつつあるかを識るに足る。

東 海 道 教 報

◎豊橋に於ける日蓮主義の勃興は東海道一隅を風靡し各宗教派をして畏縮せしむる者あるは屢々本誌に記載せる所なるが國友文學士はさらに揚を地方に飛ばして教壇擴張に努めつつあるは法と人と國とのために敬意と感謝を表する所である十一月三日、南設楽郡千幡村に出張し晝は字稻木の信徒の備ふしにて講話會を開き晝は字片山にて日蓮主義の特長を發揮して熱心宗を改めて信仰に入りたる者もあつた九日午後五時より日蓮新仰講演會を開き高島平三郎君は本誌に記載せる「日蓮主義の特長」に就て直截明瞭なる辯論を以て卓越

の識見を發表し本多日生師は時代と宗教と題し現代危機の思潮を概し根本教治の力ある者は日蓮主義を擧いで他に存せざる理を説いて滿堂の聽衆を酔はしめ同地一流の聽衆多くして未曾有の盛況であつた十五日、聽衆會の例會を開き國友師の法話あり信仰を強め「十八日」青年會にて聽衆二百を興へ伊藤實樹居士吉田聖晴君國友文學士とは熱誠よく日蓮主義が人生各方面に直接の交渉あるを説いて有益なる者であつた十一月二十四日の兩回に亘りて題目講中の例會を開き本會論及び立宗の大精神に就て極めて熱烈に辯じ「二十三日」より毎月三十八日に於て豐橋一流の有志のため聖語講義を開始して日蓮上人の人格及主義の深奥を傳ふ會は同地有志者は高島先生及本多大僧正の來豐したるを羨とし天晴會の設立を決議し爾後進行第二回の發起人會を開きしと云ふが新らじき四十五年の天地に於て發會式を舉ぐるに到ること信する

國友師は文書布教部を設置し毎月統一百部を施本せられつつあるが眞に盛なものである◎什二三の靈跡として其名高き見付支妙寺は十月十二日の兩日宗廟御正當の大法會を執行す四時よりの參詣者萬餘を數へ其難言言語に絶す午後七時に至るや壯嚴なる法要を修し次で講演に移り報徳會支部長職部儀作君は「信心成就の人」吉田聖晴師は「日蓮上人の活動主義」山本通輝師は「日蓮上人三度の光明」なる上下に各至誠熱烈以て長廣舌を揮ひ最高最善なる上人の主義珍瓏珠の如き上人の人格は三

京 都 教 信

氏に依て遺漏なく紹介せられ無限の實感と法益とを興へ當夜通夜せるもの男女合して二百名次で十三日に至るや天氣清朗午後一時鐘經唱題終て野中師の「佛教の眞實」吉田師の「是好真藥」なる題下に講演あり何れも着實にして壯快なる語句は能く法華一乘の眞意と妙法の眞諦なる所以を説き以て多大の法益を興へ午後四時閉會す因に山本師の干誠熱烈なる法華の反響は近來見付界隈の聽衆僧に一大刺激を興へ我等も何とせればなるまいと漸く口を履まし始めしと云ふ。

◎前號所報の京都天晴會並に聖門下同志會主催の日蓮主義大講習會は十一月三日午後一時より會場妙蓮寺講堂に於て發會式を舉げた(一)開會の辭郡長兼田義路(二)御書拜讀野老乾爲師(三)大阪天晴會祝辭池田(四)三郎氏(四)經路天晴會祝文野老乾爲師(五)聖門下同志會祝文日蓮研究會祝文吉川松太郎氏(六)來賓禮代京都府官正岡文吉氏聽講者總代武田顯實師等の順序にて式を終り招待者一同には茶菓を呈せり同日二時より大演說會を開き(一)日蓮上人の史的研究所文學博士三浦周行君(二)所感武田宣明氏(三)佛教の統一點本多大僧正來會者三百餘名なりき、三日より七日に至る毎夜午後六時より講習會を開き立正安國論閉目抄本拿抄綱要本多日生師日蓮上人

教義と倫理問題武田宣明講師國論野口日主
 講師信仰の研究我國思想界に於ける日蓮上人
 の持長高島平三講師及び瀧邊吉郎講師等の
 有益なる講演ありて四百余名の聴講にて盛會
 なりき本山妙滿寺布教部に於ては統一講及日
 蓮上人の遺本數百部を會員へ配布し又御會式
 と云ふ小雜誌數百部村上勸修衛大光教百部講
 渡憲教師等より寄贈ありき、講習會終て各講
 師並に委員有志者數十名は從三位林誠一氏宅
 に於て懇親會を開いて紀念攝影をなし種々の
 餘興ありて頗る盛會なりき

◎聖門下同志會は第三十六回例會及暮年會
 を十二月三日明德學園内に開き常議員中村寬
 澄中澤眞立明渡憲教會計金光孝碩今井即明の
 講師は任期満了に付き役員の改選ありき

大阪教信

◎大阪天晴會第十例會 十一月五日午後一
 時より中之島公園大阪ホテル内に開會今回は
 折所京都講學會に出席せられたる本多日生上
 人を特招し先づ幹事池田爲三郎君の「開會の
 辭」に次で同根本日種君は「日蓮上人の宗教」
 に就て述べ夫より「時代思潮と日蓮主義本多
 日生師」二時間餘に及び最も眞摯熱烈なる講
 話あり所謂諸夫も志を立つべし果敢感激の餘
 聽衆の一人利を通じ講を求め即時入會を申込
 みの會衆五十餘名天晴會員安川繁種君も本多
 講師に随伴來會せり、午後五時閉會
 ◎大阪實業團體の講話 大阪織物同業組合

に於ては本年四月以降毎月宗教家教育家等を
 聘して店員の精神修養講話會を催しつゝある
 も未だ日蓮主義の講話なかりしが今回大阪天
 晴會評議員西島竹藏君の紹介に依り布教師梶
 木日種師を聘することとなり即ち十一月二十
 日夜東區南久太郎町二丁目該組合事務所樓上
 に於て「人の道とは何ぞや」と題し平明にして
 趣味あり益なる同師の講話ありしと云ふ會
 衆二百餘名今後大阪地方に於ける這種の會合
 に對し漸次吾が日蓮主義の感化を及ぼさんと
 こそ望まされ

神戸教信

◎日蓮報柳義會 神戸高商の同會は其第五
 例會を十一月二十四日午後三時より同校教室
 に於て開會左の講話あり「日蓮上人の信仰梶
 木日種師」今回は講話に關する道典の沿革を
 會に於て發寫の上會員に頒ち聴講の便を計る
 會衆十八名にして午後四時閉會を告げたり

廣島教信

◎廣島本願寺に於て十一月十日より十三日
 で嚴肅なる會式を行ひ參詣者室内に充つるの
 盛況を呈し高田日輪師島田信都大橋權僧正の
 有益なる講話あり
 ◎當地に於て篤信の士相會し天晴會設立の詳
 成り十一月十八日發會式を舉ぐ大橋師は導師

盛岡教信

當地法華寺の會式法要に笹川眞應師下向せら
 れ十一月十二日十三日の兩日に前後六回の講
 演あり信徒何れも信仰安心の歸嚮に就て法悦
 限りなく法鼓に打たれ候願ふるに昨年の今日
 は本宗の明星一時に盛開の地に集まり遂に地
 明會を現出致候も一周年の今日地明會も燈ひ
 を要する場合に相成候所笹川師が誓願傳令の
 結果當地今信の者の大に覺悟を要する秋に相
 成り來春より取敢へず文書傳道の機關を定め
 雜誌統一を官衛軍隊學校等へ寄贈する方法を
 採り申候 (翌年)



討報

◎顯本法華宗と云へる小教團が今や國民思想の覺醒に對つて全分の力を致し日蓮主義宣傳の大業に
 瘡るべく異體同心の實を現はして居るのは既に世の識る所であつてさらに精進の氣を勵まして圓浮
 統一の理想を實現せねばならぬ吾等は内教團の僧侶等しく此精神に一統せられ居るを慶ぶと共に新
 舊の結合を生み出すの力が何れに在るを知らねばならぬそれは過去を顧みるに沈勇剛毅なる前
 管長日映大僧正の賜であるとおもふ今の教團に於ける興學布教の道の開けたのは日映大僧正が大果
 斷を以て宗制を公布し全國巡教の途にのほりて傳道の先驅者となり銳意努力して後進を策勵したる
 に因る爾後病床に就きて靜養につとめたりしも九月二十日六十七歳を一期として歿りに入り給ひり
 十一月十二日七里法華大檀林講堂に於て本多管長親下大導師の下に二百餘名の僧侶檀信徒千餘名は
 一同に隆福一貫の妙味を捧げて生前の勳業を謝し佛陀三寶の知見を請ふて寂光の攝收を禱り滿座悉
 く敬慕の思ひにうたれつゝ森羅莊重なる大儀式は終りを告げた。

教學財團基金申込書報告

第四十二回(四十四年十一月)
 第三十日迄到着分)

▲特別會員

- 一 金貳百圓也 品川妙園寺檀家 增田 幸七
- 一 金貳百圓也 京都市錦小路高倉西入
- 一 金壹百圓也 京都成就院檀家 富永東一郎
- 前申込金拾圓ヲ取消ス
- 第四十一回(四十四年十一月)
 第三十日迄到着分)
- 金貳拾圓(二) 千葉縣押原元立善寺檀家中
- 金壹百圓(一) 東京慶印寺代表 本橋 利七
- 金五圓(七) 神奈川縣大豆戸 本 乘 寺
- 金拾圓(四) 東京法恩寺前住 森本 眞良
- 金壹圓 同寺檀家 長谷川たみ
- 金八圓(四) 千葉縣日當本盛寺住波邊 泰基
- 金六圓(二) 福井市善慶寺住職 加藤 智明
- 静岡縣大土肥妙高寺檀家
- 金壹圓 神尾茂右衛門 八拾錢宛 渡邊實二
- 芹澤常太郎 六拾錢 久保田源藏 五十錢
- 伊藤榮次郎 四十錢宛 小林市三郎 小林梅
- 次郎 原菊次郎 原萬助 原芳右衛門 神尾
- 休八 參拾錢 高橋萬作外一名(以上完納)
- 神奈川縣本興寺檀家
- 金參圓宛 保田喜助 同圓吉 同德藏(第三
- 回)石川仁太郎(第二回)三橋金太郎(第一回)
- 金貳圓宛 保田竹治郎 梅澤藤吉(二) 石川

宗務廳錄事

依願解本職

任教務部長

明治四十四年十二月五日

顯本法華宗宗務廳

宗内一般

教務部長僧都 藤崎 通明

價都 笹川 眞應

吹次郎 石井庄太郎 飯島孫八(二) 三橋伴藏(一) 壹圓宛 保田庄藏 同太郎(三) 三振國五郎 飯島萬藏(二) 保田豐治郎 金壹圓六拾錢 石川源右衛門(二) 六拾錢宛 保田平藏(三) 同庄太郎 三橋忠藏(一) 五拾錢宛 保田伊勢松 同清藏(三) 四拾錢宛 保田幸八 同清太郎 同國藏(三) 持田利之助 小袋久藏 保田兵作 同梅太郎 同惣治郎 同治郎作(一) 參拾錢宛 保田太四郎 同半藏(二) 保田菊治郎 同虎次郎(一) 參圓也 保田榮太郎外十五名分合計
 統一第一九〇號報告中金參拾錢保田安光ハ同若三郎ノ誤

●千葉縣古所安住寺檀家
 金五圓 片岡修徳 金壹圓宛 綠川武一 板倉七太郎 綠川榮助 片岡由親 今關三郎 片岡榮三郎 同長之助 同助五郎 同鐵藏 綠川幸太郎 同國太郎 吉野徳次郎 長島榮太郎 六拾錢宛 綠川藤藏 同藤左衛門 同直吉 同新藏 同榮作 今關清太郎 片岡阿太郎 四拾錢宛 高木忠敏 綠川勘 同萬之助 同三吉 同聖吉 同儀三郎 同久松 同正衛 片岡清八 同忠次郎 同儀三郎 同儀五郎 今關留藏 渡邊又五郎 參拾錢宛 今關喜三郎 同留吉 綠川秋藏 同八十八 同久米藏 同茂松 同金四郎 同源之助 同竹松 片岡幸助 同真次 同長松 同藤吉 同惣次郎 板倉吉次郎 同文藏 井桁大之助 市川新太郎 同初太郎 拾貳圓參拾錢 綠川竹三郎外六十二名分

前號報告中 貳拾圓草刈行先寺横山會章分取消ス

弘 告

今回左の地に轉ず
 千葉縣山武郡片貝村
 本隆寺住職
 藤崎 通明



新 標 州 山 集

原 本 合 約
 三十卷 卅山元政家集
 慧明日燈抄註
 卅山元政記
 榎島昭武註

會 身 延 行 記

冊 一 本 合 約
 頁 十 五 百 七
 發 行 十 二 月 二 十 日

◎日蓮宗全書出版會編……………會員外特別流布本正價貳圓送料十二錢

深艸の病頭陀元政上人の風骨は世上騷壇別に一家の高致を傳へて艸山集の一書門外に流布するや久矣矣法資慧明和尚會て政公に侍するを得たり附録身延行記孝子元政病道者母に隨て往き母に傍ふて眠る五旬の逆旅人をして轉た孝子の情に泣かしむ暢達の行文に詩歌を點綴して景情送迎に違あらず、東武の檜島之が注脚を加へ從來首註として世に行はる、本刊書之を改編して會註となし繕讀の便に努めたり共に是れ本位文學の白眉にして又德行文學史中の逸乘たり

東京市橋區須原屋書店 電話一四九〇番

